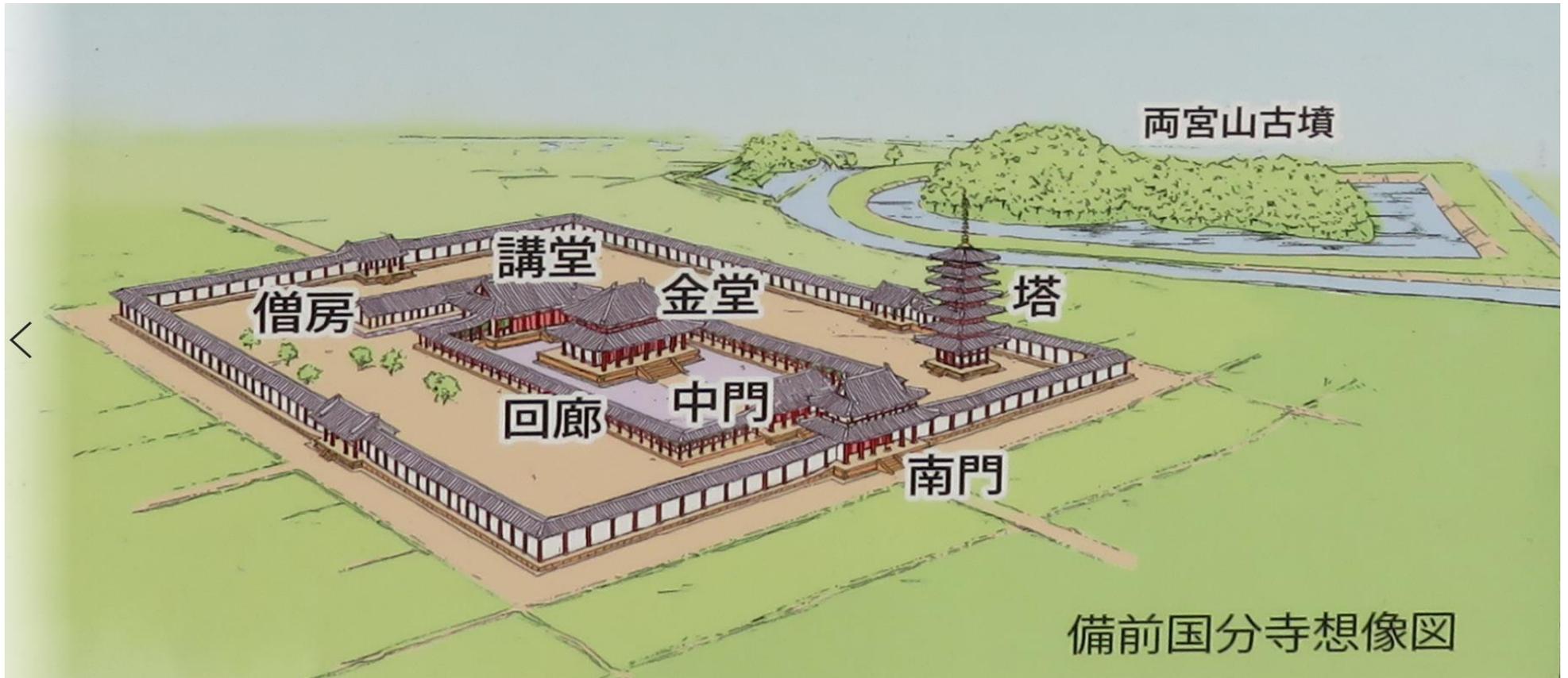


備前国分寺跡・国分尼寺跡(赤磐市)

ここが備前国分寺跡/約1250年前の奈良時代に、岡山市から赤磐市へ抜ける古代山陽道に面して造営された





これは備前国分寺が廃寺となった後、鎌倉時代後期に塔跡に建立された石造七重層塔(往時の塔の礎石は心礎のみ現存し、その上に建っている)



とう 塔

塔は、国分寺を象徴する建物です。『続日本紀』によると、その塔は七重塔で、中に鎮護国家を説いた経典を納め記っていました。

建物は一辺8.91m(30尺)、高さ60m程度と想定され、一辺17.82m(60尺)の正方形の基礎(基壇)の上に建てられていました。

礎石は心柱を支えた心礎以外はすでになくなっていましたが、その下に置かれた根石によってその配置がわかりました。基壇の側面を飾る石材等(基壇外装)は発見されず、階段も確認できませんでした。建物は平安時代のうちに失われたと考えられます。

この塔の基壇は発掘調査成果から復元したもので、心礎は奈良時代から残る実物をそのまま残し、他は礎石位置に模擬礎石を置いています。基壇外装は不明のため設けず、土が流れないように法面に芝を張りしました。木製の階段は復元基壇に登るために設置したものです。

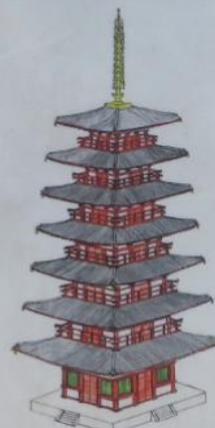
【石造七重層塔】 赤磐市指定文化財：建造物 平成2年3月20日指定

心礎上につつ花崗岩製の層塔で、鎌倉時代後期の作といわれています。現在相輪が失われ、かわりに球形の石を置いています。本来の木造七重塔がなくなった後に建てられたものですが、塔の所在を示す貴重な石造物です。



▲塔基壇の発掘調査状況(南東から)

心礎を中心に根石が並び、基壇周囲に瓦片が堆積していました。心礎は元の位置からやや移動しているようです。



◀塔復元想像図

赤磐市教育委員会
平成23年3月

塔基壇(復元)

[video](#)



石造七重層塔(赤磐市指定有形文化財)の下は往時の塔心礎

[video](#)



様々な説明板が立っている/パンフレットも置いてあった

 [video](#)



伽藍配置は東大寺(国分寺)式伽藍配置と呼ばれる形式/発掘調査から、平安時代末期に講堂と北側の回廊が焼失し(鎌倉時代以降に講堂を再建)、16世紀後半頃には廃寺となったことが判明していると云う/古代山陽道を挟んで備前国分尼寺も建立されている



遺 跡

備前国分寺跡

馬屋

備前國の国分寺の跡であり、鎮護国家を願つて奈良時代に全国に建てられたものの中の一つです。正式名称は金光明四天王護国之寺（ひかりあきよしみょうしやうてんおうごくごのてら）といひます。この寺の建立を發願した聖武天皇は、必ず好所に建立するよう命じています。

一九七五（昭和五〇）年に国の史跡に指定され、それに先立つ一九七四（昭和四九）年の発掘調査では、南門、中門、金堂、講堂、僧房等の跡が確認されました。そして、これら主要な伽藍（からん）が南北方向に縦に一直線に並び、そこから東南の位置に塔が配置されている様子から、東大寺（国分寺）式伽藍配置が採用されていることも判明しました。全国の国分寺跡のうち、半数近くがこの伽藍配置を採用しています。

この備前国分寺跡は、推定の南門と推定の中門の間隔が狭いことが他の国分寺跡では見られない特徴です。また、柱をのせた礎石（そせき）には加工の痕跡があまり見られず、自然の石をほとんどそのまま利用していたようです。このほか、創建時の軒先の瓦の文様に独特の特徴があり、注目されています。

当時、国分寺は「国の華（はな）」といわれ、文化の拠点としてだけではなく、福祉や教育の拠点としても賑わっていたようです。

伽藍配置復元図



さて、これは南門跡から中門跡・金堂跡・講堂跡・僧房跡と一直線に並ぶ方向を見たところ

[video](#)



ここが南門跡





史跡 備前国分寺跡

1 南門

南門は、伽藍がらんの南に開いた寺の正門せいもんです。一部の礎石そせきが本来の位置に残っており、柱の配置が推定できました。建物は、正面5間（17.23m）・奥行き2間（6.53m）で、中央3間が扉とびらとなる門と考えられます。

南門基壇きだんの
発掘調査状況
(北西から)▶

基壇の西側を発掘しました。基壇の周囲には、大量の瓦が堆積たいせきしていました。瓦の年代から、補修ほしゅうされながら維持された建物と考えられます。



平成 27 年 赤磐市教育委員会

こちらは中門跡

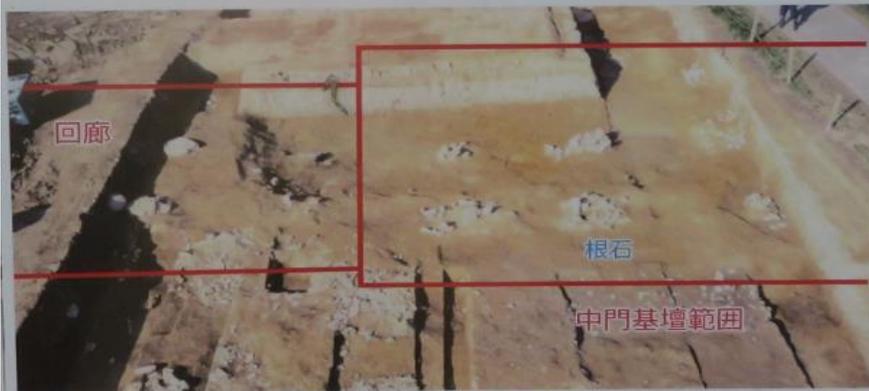




史跡 備前国分寺跡

ちゅうもん 2 中門

中門は、回廊かいろうの正面中央に開く門です。後世に池がつくられたため、礎石そせきを支える根石ねいしのみが島状に残っていました。建物は、正面5間(18.12m)奥行き2間(7.13m)で、中央3間が扉とびらとなる門と考えられます。



▲ 中門基壇ちゅうもんの発掘調査状況 (南から)
基壇の西側を発掘しました。東西には回廊が取り付きます。

平成 27 年 赤磐市教育委員会

こちらは金堂跡

 [video](#)





史跡 備前国分寺跡

3 こんどう 金堂

金堂は、ほんぞん本尊をまつる寺の中心的な建物です。
ほとんどのそせき礎石が抜き取られていたり、落とし込まれていたりしましたが、ねいし根石などの配置から、
正面7間(26.14m)・奥行き4間(13.66m)の建物であったと推定されます。
建物は、平安時代後期に大きくかいしゅう改修されたようです。

金堂きだん基壇の
発掘調査状況
(北東から) ▶



平成 27 年 赤磐市教育委員会

こちらは西面回廊跡

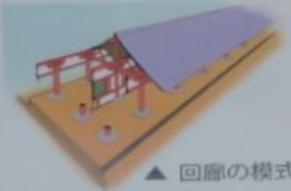




史跡 備前国分寺跡

せいめんかいろう 4 西面回廊

回廊は、屋根のある廊下（通路）で、中門に発し、講堂に取り付きます。西面回廊は多くの礎石が原位置で残っていました。梁行2間（5.35m）で、中央に連子窓をもつ壁があり、その両側が吹き放しの通路となります。こういった構造の回廊は単廊（梁行1間）に対して複廊と呼ばれています。



▲ 回廊の模式図

▲ 西面回廊の発掘調査状況（東から）
梁行に3個の礎石が並んでいます。

平成 27 年 赤磐市教育委員会

講堂跡を南西側から見たところ

 [video](#)



講堂跡の西側に取り付く北面回廊跡を見たところ



北面回廊

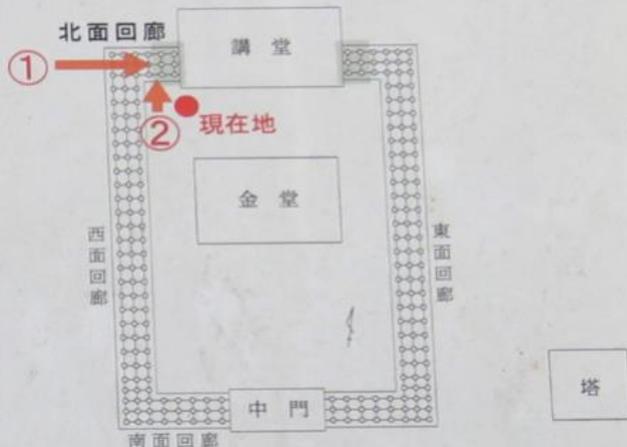
ほくめんかいろう 北面回廊 North Corridor

回廊は、屋根のある通路（廊下）です。右の図のように金堂を囲むように中門から講堂へ接続し、伽藍の中心部を長方形に区画しています。

北面回廊は、講堂をはさんで東西 68.6m (231 尺) の長さがあります。幅は 5.4 m で梁行の礎石が 3 個並んでいることから、中央に壁がありその両側が通路となります。このような構造の回廊は、通路が 1 本の単廊に対して、複廊と呼ばれます。

発掘調査では、火災による建物の崩壊によって葺かれていた屋根瓦がそのまま落下した状態で見つかっています（写真②）。平安時代の終わり頃（12 世紀中頃～後半）に講堂とともに火災で焼失してしまったようです。

整備しているのは、講堂に接続する東西各 1 間分の基壇（基礎）で、柱の位置には模擬礎石を置いています。実際の基壇はさらに東西に延びて南に折れ、中門へつながります。



▲ 伽藍復元図

*番号は写真の撮影位置を示しています。



① 北面回廊（西側）と講堂の接続部
（西から、平成 15 (2003) 年度調査）
北面回廊の梁行の礎石が 3 個並んでいます。



② 落下した屋根瓦
（南から、平成 16 (2004) 年度調査）
丸瓦と平瓦が交互に並んでいます。



▲ 回廊（複廊）の模式図

講堂跡の基壇上部を南西側から見たところ/礎石が並んでいる

[video](#)



実物の礎石は4箇所/他はレプリカ

講堂

講堂は、お坊さんが日常的に行事を行い、^{きょうてん}経典が講義された建物です。金堂の北方に建てられていました。

奈良時代の講堂は正面7間(33.0m・111尺)、奥行4間(16.0m・54尺)と想定され、東西37.7m(127尺)、南北20.8m(70尺)の長方形の基礎(基壇)^{きだん}の上に建てられていました。

柱を支えた礎石^{そせき}はほとんどが抜き取られ、一部が地中に大穴を掘って落としこまれていました。基壇の両側面には回廊^{かいろう}(屋根付きの廊下)が接続することがわかりました。

建物は平安時代の終わり頃に火災で焼失しますが、鎌倉時代には規模を小さくして再建されました。

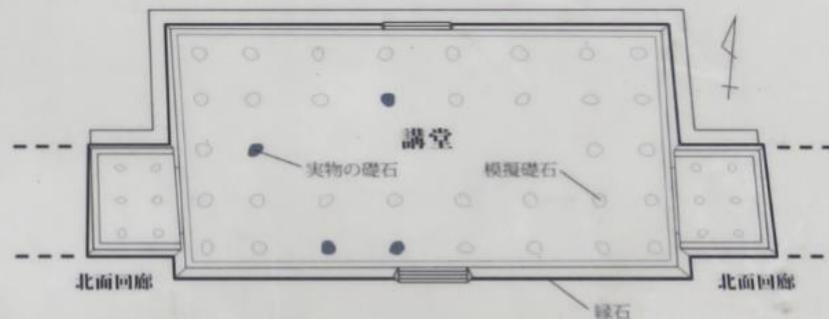
この基壇は発掘調査成果から奈良時代創建当初の規模がわかるように整備したものです。大穴に落としこまれていたり、水田の畦によせられたりしていた実物の礎石4個を引き上げ柱位置に据え、他の32個は模擬礎石を置いています。基壇の側面を覆う石材等(基壇外装)^{がいそう}は不明のため設けず、土が流れないように法面^{のりめん}に芝を張りました。階段の痕跡が残っていた正面中央に木製の階段を設置しています。



▲ 講堂の想像図



▲ 講堂の発掘調査(南西から、平成15年度)
写真内の講堂基壇後方にある薬師堂は整備にともない基壇外に移設しています。



▲ 講堂の整備基壇平面図
黒塗りの礎石4個は、地中に落としこまれていた実物の礎石(流紋岩)です。他は模擬礎石(花崗岩)を置いています。基壇外装が不明のため、基壇の大きさは周囲の緑石で表示しています。

講堂跡の基壇上部を西側から見たところ



両宮山古墳

2個の実物の礎石



3つ目の実物の礎石



4つ目の実物の礎石



講堂跡の東側に取り付く北面回廊跡を見たところ



東側から講堂跡を見たところ

[video](#)



北東側から講堂跡を見たところ



北面回廊

北西側から講堂跡を見たところ



北面回廊

こちらは僧房跡

[video](#)





史跡 備前国分寺跡

5 僧房

僧房は、僧侶が居住していた建物です。建物は正面 25 間 (74.25m) ・奥行き 2 間 (5.94m) で、東西にとっても長く、いくつもの部屋 (房) に分かれていたと推定されます。西端から 2 房分は正面各 3 間 (8.91m) であったことが判明しています。基壇の南面には、瓦積みの外装が施されていたようです。



▲ 僧房から出土した
灰釉陶器長頸瓶
(東海猿投産、9 世紀)



▲ 僧房基壇西端の発掘調査状況 (南東から)
礎石が抜き取られ、根石が残っていました。基壇西端を検出した際に南面の一部に瓦積みの外装が認められました。

平成 27 年 赤磐市教育委員会

これは元々講堂基壇の後方にあった薬師堂で、ここに移動されたい



こちらは寺域西辺中央に所在する国分寺八幡宮



これは金堂跡から南門方向を見たところで、この軸線方向の先300mに備前国分尼寺跡が存在する



さて、このエリアが備前国分尼寺跡/前方に説明板が立っている/南方向を見たところ

[video](#)



そこで、左手(東側)を見たところ/土手の向こうは仁王堂池



同じく、右手(西側)を見たところ/農地となっている





遺 跡

備前国分寺尼寺跡

穂崎

備前國の国分寺の跡であり、奈良時代（八世紀）に国分寺とともに全国に建てられた官（国）ほっけめつざいのてらの尼寺の跡です。正式名称は法華滅罪之寺ほっけめつざいのてらといひます。

この備前国分寺跡は、国分寺跡から南へ三〇〇メートルの地点になります。この池は「仁王堂池」と呼ばれており、池の周辺には備前国分寺跡の創建時の瓦と同じ文様の瓦が散在していること、礎石いしらしき岩が点在していたことなどから、備前国分寺跡がこの地にあつたと推定されています。寺域は備前国分寺跡と主軸を同じくする一町半（一三五メートル）四方のものを想定しています。寺域の東側半分は現在には仁王堂池になっており、西側半分は農地として利用されています。発掘調査をしていないため、詳しいことはわかっていません。

平成十五年三月

赤磐市教育委員会

土手の上から振り返って、北方向を見たところ/前方が備前国分寺跡

[video](#)



そこで、左手を見たところ



そこで、右手を見たところ



参考ホームページ

<https://www.city.akaiwa.lg.jp/bunkazai/ichiran/cyuumoku/bizenkokubunji/2276.html>

<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/628881.html#bizen-kokubunji>

<https://tabi-mag.jp/ok0314/>

<http://geo.d51498.com/gbpb900/bizenkokubunzi.html>

<https://blog.goo.ne.jp/rekishi-nazo/e/a4357626dc72c954080b68a7818770df>

<https://tabi-mag.jp/ok0315/>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%82%99%E5%89%8D%E5%9B%BD%E5%88%86%E5%AF%BA%E8%B7%A1>

